

岩手県陸前高田市で「えんやこ〜ら」開催

土木作業を行なう「えんやこーら」の活動

2月12日、最高気温マイナス1度、最低気温マイナス6度、時々雪も混じる天気模様の中、「えんやこーら」ボランティア活動が、岩手県陸前高田にて行なわれました。

「えんやこーら」とは、有志のボランティア団体です。メンバーは、元々は、毎週末行なわれていたいわて生協のバスボランティアに参加していた常連メンバー。そのメンバーの中から、復興のスピードをあげるために、平日も継続して活動していこうと立ち上がったのが、「えんやこーら」です。

「えんやこーら」の特徴は、土木のボランティア依頼が多いこと。一級土木施工管理技士の阿部義郎さんがいることで、普通のボランティアでは頼まれない仕事が多く入ってくるといいます。

メンバーは阿部さんを中心とし、静岡から陸前高田に活動に来て、1年間近く滞在しつつ活動されている方や、平日は別の仕事をし、休日に「えんやこーら」に参加されている方、毎日盛岡から片道2時間半かけて陸前高田に通っている方など、さまざまな方が活動していらっしゃいます。

2月12日現在、「えんやこーら」が関わっているのは、陸前高田復興商店街(未来商店街)。ここに、お店が出店し、にぎやかな場所になる予定です。「えんやこーら」では、店舗となるコンテナを組み立てたり、未来商店街建設地横に流れている川に橋をかけたり、川に落ちないように、柵を作ったりしています。

「えんやこーら」が活動している場所のすぐ隣では、けせん朝市が開催されていました。作業中にも朝市の方が差し入れしてくださったりと、互いに築き上げてきた信頼関係が伺えます。未来商店街の理事で、けせん朝市を運営している伊藤博之さんと出会いました。陸前高田市では「高田の市日(いちび)」という朝市が200年以上前から開かれていたといいます。

「けせん朝市は、陸前高田の朝市の元祖なんです。その元祖が元気にならないと、他が元気になりません。今は、11月より復興鍋というのを行なっています。これは、このあたりの仮設住宅に住んでいる方が、集まって話せる場所をつくりたいという思いで始めました。鍋は、私が調理するんですよ」と笑います。

「けせん朝市の看板娘は、84歳! その方が、復興した朝市を見て喜んでくれるまで、全力で朝市を開催していきます」と話していらっしゃいました。



土木作業などを行う「えんやこーら」には、20人ほどが登録している。

この日は、未来商店街から車で5分弱走ったところにある山の中に入り、柵や橋の欄干をつくるために使う木を、未来商店街まで持ってくる作業がメインの仕事でした。山に入ると木は、すでに「えんやこーら」が依頼した業者によって伐採されており、その中から、柵や橋の規格にあった大きさ、強さの木を探し、大型トラックに積む作業を行いました。大型トラックも、ショベルカーも乗りこなすのが、「えんやこーら」。大き目の木は、ショベルカーを駆使して運び、小さめの木は、人の力で運びました。

「えんやこーら」の活動は、朝の9時から始まります。ずいぶんと早いスタートです。その理由について、金子さんは、

「そんなに大きな団体ではないけれど、いただく仕事はたくさんありますし、あとは、ダンプカーなどのボランティアに必要な機材を借りる期限が決まっていることもあり、スピードをあげて、作業していかなければならないのです」と言います。

工藤さんも、「毎回毎回ボランティアに入るたびに、夏までには、何とかここまでしたい、冬までには何とかここまでしたいと、みんな必死で作業しています。少しでも、多くの方が、早く、陸前高田という地で、暮らし続けていく手伝いがしたい。どんなに小さな力でも、何かはできるのだ、と思って活動しています」と語ります。



この日に参加した「えんやこーら」のメンバー。

また、杉村さんは、「行き始めると、被災地の状況が分かり、待っている人がいる、ということが分かります。そうすると、もう、ボランティア活動をやめることはできないですね。確かに平日は、別の仕事がありますが、『えんやこーら』のメンバーが今日も頑張っている、と思うと、何とか予定を調整して、『えんやこーら』の活動をしに行かなければ、という思いになります」と話していました。

震災後11カ月経った、陸前高田市

いわて生協の金子さん、杉村さんが、陸前高田市を車で案内してくれました。陸前高田市内に入っていくと、トラックやコンテナなどを使った仮設店舗が多数姿を現しました。海から6~7km離れた気仙川が、津波の影響で渦を巻き、まちを飲み込んだ話などを伺っていると、突然、開けた場所が出てきました。海からの津波の被害にあった場所です。あちらこちらに、ガレキの山が積み重なっています。

「市役所も、病院もすべて流されました。社会福祉協議会も流されてしまい、なかなか、被災地に必要な支援の統括が発災当初はできなかったですね」と金子さん。

現在、津波の被害を受けた、陸前高田市の沿岸の土地は、5メートルほどかさあげをしないと住めないといわれているそうです。

金子さんは、「もともと、陸前高田は過疎地域で、震災がなくても、人が地域の外に出て行く傾向が加速していました。この震災を受け、1年はなんとか頑張れた人も多いと思います。しかし、2~3年後はどうでしょう。1年我慢したけど、改善する兆しが見えない地域に住み続ける人は、多くはないでしょう。人口の移動が加速するのは、これからだと思います」と話していました。

「えんやこーら」は、「何とか陸前高田で、みんながもう一度笑顔で暮らしていけるきっかけをつくりたい、そして、陸前高田に住んでいた人が大切にしていた陸前高田の町を早く取り戻したい」との思いで、毎日活動しています。その思いは、最初はかたくなに「片付け作業は、私たちがやる」と支援を拒んでいた陸前高田の人の心を動かし、今や、信頼される存在となりました。メンバーが持っているのは、純粋な「あの人の笑顔がみたい」という思いです。陸前高田が再び笑顔あふれるまちになるよう、今日も「えんやこーら」の活動は続いています。